

道具の開発における物語の重要性

— 与贈循環の概念から物語を捉える —

The importance of the story in the development of the tool with giving a deep awareness

- Understanding of the importance of the story with the concept of “Yozo cycle”-

○ 永田鎮也（日本光電工業株式会社 荻野記念研究所、NPO 法人場の研究所）

清水 博（NPO 法人場の研究所）

Shinya Nagata, Nihon Kohden Corporation Ogino Memorial Laboratory & “Ba” Research institute
Hiroshi Shimizu, “Ba” Research institute

Abstract: Historically speaking, two types of tools by human beings have been developed, the tool in pursuit of function only, “Yogu”, and the tool with giving a deep awareness, “Dogu”. What does the difference come from? In this study, the stories of having the concept of “Dogu” were enlightened with the theory of “Yozo cycle” proposed by Hiroshi Shimizu as a core concept of life. In 1925, “Mingei movement” based on the “beauty of the usage” was declared by Muneyoshi Yanagi in Japan. Pursuit of the ultimate usage led to the changes from “Yogu” to “Dogu”. Based on “Yozo cycle”, the secrets are the cyclic core stories of the nameless pure devotion in creation and thankfulness. Consequently, also before and after “Mingei movement”, it was suggested that the cyclic core story of the nameless pure devotion, the pure Yozo cycle, self-organized the deep awareness and impression of human beings and changed “Yogu” to “Dogu”.

Key Words: Dogu, Yogu, Yozo cycle, pure Yozo cycle, Ba, self-organization, story, nameless pure devotion

1. 序論

人類は数々の技術を創出し、文明を発展させてきた。新しい技術は生活を豊かにし、便利で快適な社会を実現した。画期的な技術革新は、時に産業革命と呼ばれる変革を起こし、生活の質を飛躍的に変化させて来た。

本研究では新技術で創出されたツールを、機能を追求した用具と、人類に深い気付きを与える道具に大別した⁽¹⁾。特に柳宗悦により「用の美」として発見された民芸⁽²⁾、新陰流の袋竹刀を深い気付きを与える例として取り上げた⁽¹⁾。更に清水博の提唱する与贈循環の概念⁽³⁾を用い、今まで解明の進んでいない道具の本質や設計原理を考察して、現代社会における道具の意義について言及した。

2. 用具と道具

本研究では用具を利便性や高速性などの機能を追求したツールと捉え、道具をあるシステム（例えば生活の中の作法や日本文化で「道」と呼ばれるシステムなど）の中で使うことで人生に深い気付きを与えるツール（道に具わるツール）と捉えた。

2.1 用具の重要性と限界

様々な機能を追求した用具は、便利で快適な生活を実現し、ある時は産業革命のように歴史さえも変革させて来た。反面、用具は経済活動に結び付いて大量生産や大量消費の時代を招き、人類が用具を使うだけでなく人類が用具に使われる事態も生み出した。人類は用具の使用による快適な生活と引き換えに、人生の真の豊かさや深みを感じる喜びを手放した感がある。少なくとも現代社会において、用具にそのように高適な精神性を求めてはいないであろう。

2.2 道具とは何か

人類に深い気付きを与える道具の本質とは何であろうか。日本では、1925年に柳宗悦が民芸運動を宣言した。民芸とは、普段使いとして作成された日用品に美を見出す新しい美の概念である。柳はこの美を“用の美”と捉えた。日用品を製作する職人は、自身の名前を出さずに作品を世に出し、その使い手はある作法のなかでその作品を日常的に使

用する。人々は日常的に使い込む中で、その作品に現れる“用の美”に気づくのである⁽²⁾。この瞬間に、機能のみを追求した用具は道具へと昇華する。

柳は“用の美”における創造と気づきの原理に、仏教、特に浄土門における他力本願の原理へ通底する特質を見出した⁽²⁾。特に柳は仏説無量寿経（大無量寿経）にある48願の第4願「無有好醜の願」、即ち「この世に美しいものや醜いものといった分別によって分けられる世界が生じないようにする」という内容に注目し、名前を付けない制作行為や感謝の表現がこの世界を拓くことに気付いた。作り手の技量や意図を超えた偶然の産物としての創造、生活の場で与えられる、使い手の審美眼を超えた気づきによる美の発見などが、他力本願の原理へ通底する。使い手により発見される“用の美”は、掘り出し物の骨董を発見する時のような邂逅と洞察力が必要となる。奇しくも現代科学における発見の分野で重要視されるセレンディビティー（偶発力）がイスラム商人のサランディープに由来し、セレンディップ、セイロンとなって仏教の聖地スリランカの地名につながることも興味深い。柳の美論は“美の他力道”とも称され、捕われのない純粋な直感的審美眼の重要性に光を当てた。

民芸運動以前に歴史を遡って道具を捉えなおすと、与えられる気づきは“用の美”に留まらないことが判る。本研究では、一例として新陰流で用いられる袋竹刀にも考察を加えた。袋竹刀は450年前に流祖上泉伊勢守が考案した竹刀である。上泉は敵と自身の中心線（人中路）を正対させ、自身の人中路を截り徹す十文字勝の原理を発見した。人中路を正対させると、敵の刀が自身に当たる少し前に刀を持つ敵の拳が人中路を通過する。予め敵の拳を狙うとタイミングを逃すため、敵に截り出させた後、いのちの感覚に随って自身の人中路を截り徹す。ここでは最後まで敵と分離しない、禪に通底する心が求められる^{(4)・(5)}。

この精妙な心を実現するため、敵に対抗する自我を戒める三箇捧の教えが伝わる。三箇捧は敵を“截る、防ぐ、危

ぶむ”という自我心を捨て去ることを意味する。袋竹刀は先を八割にし、縛って束ねずに皮の袋を被せた衝撃吸収性の高い竹刀で、手を防ぐ鍔を持たない。即ち設計思想に“截れない（竹製である）、防げない（鍔がない）、危ぶむ心を持たせない（衝撃吸収性が高い）”が盛り込まれている。初心・熟練を問わず、この竹刀を遣う者は全て三箇棒の教えに包摂される⁽¹⁾。道の作法に則して袋竹刀を遣う中で深い感動、畏敬の念、感謝の念さえもが喚起される。

以上、深い気づきを与える道具は、美の発見のみならず、その道の極意を全身に浸透させて生き方に気づきを与え、設計思想の持つ豊かな包摂性に対し自ずから畏敬の念や感謝の心を生じさせることが判明した。

3. 道具の設計原理 一純粹与贈循環一

用具が道具へ昇華するために必要な要素は何か？以下に清水博が提唱する与贈循環の概念を用い、道具の設計論を考察した。

3-1. 無記名三味の表現

清水によれば、細胞から社会的な組織活動まで、生命は各階層で多様性のある役割を持ち、互いに役割を演じ合っ即興的にドラマのシナリオを創出し続ける。シナリオはコンテキスト（意味情報）を持つため、明在的なシャノンの情報量だけではモデル化が不可能である。清水は、意味情報の創出には自己と他者を分離する自他分離的な情報構造（卵の黄身に相当する明在的な情報）と自他非分離的な情報構造（卵の白身に相当する暗在的な情報）が同時に必要なことを発見し、即興劇モデルを提唱した。

更に近年、清水は生物に係る様々な活動、即ち広義の生命性を“いのちの活き”と呼び、暗在的な意味情報の創出に、与贈循環の仕組みが必須であることを見出した⁽³⁾。民芸や袋竹刀における作り手のグランドデザインや制作を“表現”という言葉で括ると、ある種共通した性質の物語が表現に付与されている。「無記名三味の表現（名前を付けない献身的な表現）を行うことで、非連続的な飛躍（気づき）が与えられ、これが循環的に繰り返される」という性質で、清水により与贈循環⁽³⁾と名付けられた。この中心的な物語部分も、清水の与贈循環に広く含まれる概念であるが、純粹な意味では生物が永遠に実現できない崇高なテーマをこの物語が有するため、本研究ではこの核となる物語の性質を特に“純粹与贈循環”と呼んだ。このように実現できない崇高なテーマを繰り返す純粹与贈循環の物語が、何故表現のコア部分に必要なのであろうか？

3-2. 純粹与贈循環の持つ2つの機能

純粹与贈循環は、主に2つの機能を持つ。第1は周囲の生命による様々な表現をコアの物語に引き込みながら生命全体の表現を自己組織し、ドラマを創出する機能である。この自己組織のドラマに組み込まれた周囲の生命は、多様性と自由度を与えられながら、無意識に与贈循環の一員として表現を行うようになる。第2は、与贈循環の一員として表現を行う中で、各生命に非連続的なドラマの飛躍（気づき）を生じさせる機能である。第1の自己組織とは異なり極めて暗在的な機能である。これら2つの機能によるドラマの飛躍が大きい場合、その気づきは大きな感動を生じさせる。以上より、各生命のドラマを自己組織して暗在的な機能で気づきをファシリテートするため、道具の設計にはコア部分の物語に純粹与贈循環の構造が必須となる。

4. 創造、感動と感謝を耕す社会

純粹与贈循環は、作り手の創造性のみならず使い手の気づきと感謝の念もファシリテートする。

用具の開発は、高速性、利便性、快適性を実現して現代

社会を方向づけてきた。常に経済発展に連動し、むしろ経済発展を義務付けられることで、用具の性質が決定されてきた。従って用具は人類の欲望的要求を満たし、生活に資する性質を持つ存在であれば良かった。

一方歴史を振り返ると、このような用具の開発とは一線を画した道具の開発が行われてきた。道具は欲望的要求よりもむしろ芸道に具わる形で深められてきた。道具は高速性、利便性、快適性よりもむしろ作り手と使い手の間に生まれる創造性、感動、感謝のドラマを育ててきたと言える。このような形で道具により耕される社会が小規模ながら一部で実現されてきた。今後は用具の持つ明在的な機能性を生かしつつ、用具に使われる人類から感動と感謝に包まれた人類へと時代を進める必要がある。そのためには、気づきを与える道具とそれを使用するシステムの創出が重要となる。その時に道具やシステムの設計理論として、純粹与贈循環は重要な役割を果たすと考えられる。

5. 結論

以上、純粹与贈循環はコアの物語として道具やシステムの設計原理に用いられ、作り手と使い手の双方に深い気づきと感謝の念をファシリテートすることが示された。純粹与贈循環は道具によって未来の社会を耕すために、重要な概念となると推察される。

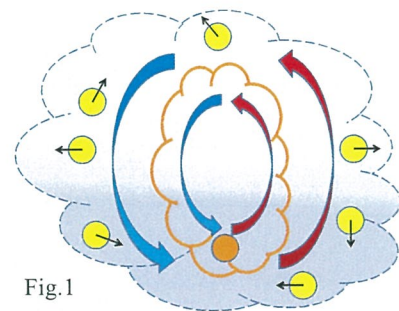


Fig.1

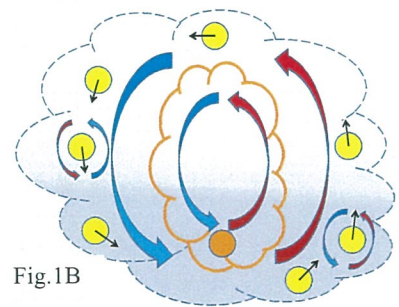


Fig.1B

Fig.1 Yozo cycle and the core story of the pure Yozo cycle in Ba
Fig.1A shows the first step of Yozo cycle. The core story of the pure Yozo cycle induces a dynamism in each independent elements of life. Fig.2A shows the self-organization step of each elements of life. A few elements begin to realize Yozo cycle.

参考文献

- (1) 永田鎮也，痛みからの創出，Mind-Body Science, Vol. 13, pp. 24-25, 2003.
- (2) 柳 宗悦，新編美の法門，岩波文庫，1995.
- (3) 清水 博，いのちの自己組織，東京大学出版会，2016
- (4) 清水 博，生命知としての場の論理，中央公論社新書，1996.
- (5) 柳生延春，柳生新陰流道眼，島津書房，1999.